

# ため池の自然

No. 2 September 1984

## 池の動物 1. アメーバの世界

静岡大学 橋 本 碩

白亜の殿堂などという白亜は主としてアメーバによってつくられたものである。そのアメーバは海産の有孔虫である。有孔虫の殻は貝殻同様カルシウムを含んでいる。アメーバが分泌生殖したのであるからまさに貝と同じで立派な外骨格である。つぎに火打石やチャートの生産にもアメーバが一役買っている。この方は有孔虫と異った構造の骨格をもつ放散虫というアメーバで、やはり海産である。放散虫の骨格の成分はシリカだ。これらのアメーバは本体が死んでも骨格は残って海底に堆積し軟泥 ooze となる。これらが隆起によって地上に出ると白亜やチャートとなるのである。ところでアメーバーが骨格をもつなどという話は初耳という人もあるが、実はアメーバで骨格をもたぬものはごく少数派なのである。では池や沼など陸水の世界に目をむけてみよう。

やはり目につくものは骨格をもつアメーバだ。もっとも多いのは有殻アメーバの仲間である。池の中のあらゆる基物の上をはいまわっており、時に水槽中にも大発生してガラス面に多数付着していることがある。大きいものは殻の直径 1mm を越え肉眼でもみえるが、人はこれをみてもアメーバとは思わない。殻の窓から仮足を出してはいまわっている有様は貝殻を背負って歩く小さな貝の子を思わせる。ナベカムリの仲間は鍋をふせた形の殻をもつ。形状、色、デザインなどは種ごとに異っている。殻の成分はゼラチンであるからもろい。ツボカムリの仲間は粘液に微細な砂粒などをつけて固めた殻をもつがその形はつぼ型のものが多い。やはり色々な形の殻をつくり種ごとに出来ばえを競っている。海の放散虫にあたるものは淡水では太陽虫の仲間である。オオタイヨウチュウは 1mm に達するので肉眼でも見える。やはりいたるところの水にすむ。体は球状で針状の骨片が放射状に多数長く出ている様子は太陽の光芒を思わせる。実際にはつき出た針の表面をうすい原形質がおおっている。有殻アメーバは基物の上で生活する底生生物であるが、太陽虫の仲間は水中を漂う浮遊生物である。これらが悠然と漂流する姿は実にさん然と輝く太陽のように美しい。しかし中にはカゴメタイヨウチュウのように柄を出して基物に固着しているものもある。

骨格をもたぬアメーバはもっとも目につきにくいがやはりあらゆる場所の水にごくふつうにいるのである。骨格をもたぬがゆえにその外形は定らず、全く不定形であるように思われるが実はそうではない。骨のない裸のアメーバでも種ごとに特有の形をしているのでやはり見分けがつくのである。たとえばバチアメーバというのは三昧線のバチのように前ひろがりの扁平な形をしており、この体形を保つ範囲で輪郭をたえず変えている。広がっている方に進むことから前後の分化が認められる。ナメクジアメーバは体がひょろ長く、前後関係はいっそう明瞭で常に前方へ進みスピードが

速い。アメーバの世界でも速くすすむためには流線型になる必要があるようだ。これらのアメーバは体を基物に密着させてすべるように進むが、オオアメーバなどは仮足を手足のようにのばし体をうかせて歩いているような動きをみせる。仮足の出し方はでたらめ方向で、進み方も前後左右気のむくままである。この仲間はもっとも教科書どおりの姿と動きをしてくれるので学校での実習に用いるのに都合がよい。さてこれらのアメーバも何かのはずみで基盤をはなれ漂流する形になると球状に変り、四方八方へ仮足を出してコンペイトウ型または星型になる。これは要するに手足をのばして早く何かにつかまろうとするためである。また基物につくと再びもとの種に特有の形にもどるのである。いざというときはどのアメーバもこのように変幻自在の本領を発揮するわけだ。

生物がはじめて水中に誕生したとき、その姿はアメーバに似ていたと考えられる。そのような裸の細胞がやがて外側を細胞膜でつつむようになった。次に細胞が分裂しても分離せずそのまま集団生活をつづけるようになったものが多細胞動物である。今日の普通の細胞も細胞膜をうまく除去してやると裸の細胞になってしまう。こうなるとどの細胞でもアメーバのよう行動するようになる。白血球やリンパ球は体細胞であるがはじめからアメーバのように動き細胞間隙などをぬって歩きまわっている。植物の粘菌にみる変形体もアメーバ様細胞として著明である。多細胞生物の体細胞にもこのような自由の身のアメーバ型細胞 amoeboid cell は意外に多く存在するのである。裸の細胞はいわば生物の原始の姿であり、その姿のままで今も変わらずに生きつづけているのがアメーバである。生物は単純なものから複雑なものへと進化した。生物の進化では生存競争に勝ったものが適者として生き残り、そうでないものは滅び去ったと教科書に書いてある。そのとおりならアメーバのように単純なものは原始の昔にはいたがやがて進化して姿をかえてしまったはずであり、姿をかえずにいたらやがて滅び去ってしまったはずである。だが事実はさにあらず、実にアメーバは地球上のあらゆる場所の水にすむだけでなく、たとえば人の口中には口腔アメーバ、腸には大腸アメーバや有名な赤痢アメーバなどがすむように、すべての動植物の体内にそれぞれ特有のアメーバが常駐している。しかもそれらは池や自然の水にいるものと外見上さしてかわらない姿をしているのだ。アメーバは水が乾けばシストをつくって休眠する。こうなると花粉や胞子のように風とともに上空へもまい上り、何千キロもの長旅もする。つまり空気中にもぼう大な数のアメーバが漂って生きつづけているのだ。このようなシストが水に落ちればまた元のアメーバの姿になって歩き出す。だからどんなきれいな水でもふたをあけておくといつのまにかそこにアメーバの姿を見るようになる。

なぜアメーバは単純な原始の姿のままでこのようにありとあらゆる場所に適応し、しかも不死鳥のように生きつづけられるのか。アメーバは裸のままで不都合はないのか。それなら裸の細胞は着物を着る必要などなかったはずである。つまりは生物は原始のままで進化しなくともよかつたし、進化する必要などなかったのか。アメーバはこのような生物学の謎をとき我々に多くの解答をあたえてくれる生物である。にもかかわらずアメーバは今もその姿を誰にもみられることなく池の中にすんでいる。有殻アメーバや太陽虫も裸のアメーバもシャーレー中で容易に飼育できる。ただ見ていているだけで面白いし数多くのことを学ぶことができる。このような原始の生物の世界をぜひ一度見てみることをお勧めする。

# 環境の変化と淡水産の貝類について

名古屋市立名北小学校 田 中 守 彦

## 1. はじめに

20年以上前に、愛知県のほど全域にわたって淡水産の貝類の分布状況を調べ、それから10年後同じような調査を名古屋市内で行い、環境の変化の著しさ、種類の激減ぶりに驚いたものである。

近頃、一時見かけることの少なくなった野生のメダカが、名古屋市西部の富田町、南陽町で沢山見られるようになった。水の浄化や、蚊の駆除に役立つということで放たれたタップミノウが予想以上に繁殖し、それにともなってメダカが激減したように見えた。もっとも、野生のメダカが減ったのは、タップミノウに追いやられたというより、環境の悪化した水域が増えたため、悪条件下での生活に強いタップミノウが残り、メダカが減ったのが真相だと言える。

淡水産の貝類の場合も、護岸工事その他で、環境の一部あるいは大半が変わってしまった場所では同じようなことが言える。しかし、中には工事前と工事後しばらくたったあの分布状況にあまり差のない地域もあるのでそこを取り上げ、環境の変化と貝類の分布についてふれてみたい。

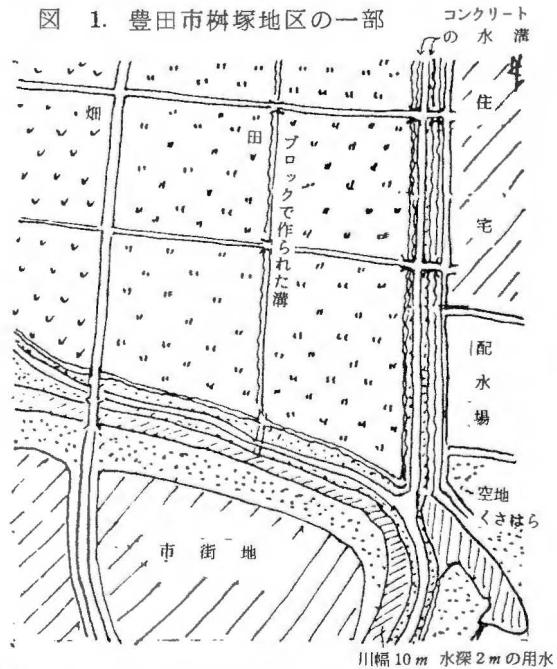
## 2. 豊田市の桝塚地区

豊田市の桝塚地区は、豊田市の南東の端矢作川の右岸にあり、灌漑用の用水が縦横に走っているところである。20年ほど前には、用水の側壁が木板で補強され、泥質の水底に水草がよく茂り、川岸から川底をのぞくと、水草の根元付近に淡水貝が水管を開いている様子がよく見られた。また、魚類も豊富で元気よく泳ぐ姿がよく見られた。

この地域で見られた貝類は、タガイ、カタハガイ、オリエボシ、マツカサガイ、トンガリササノハ、イシガイ（マシジミ）といった大型の二枚貝、オオタニシ、マルタニシ、ヒメタニシのタニシ類、カワニナ、モノアラガイ、ヒメモノアラガイ、ヒラマキモドキ、カワコザラなど、愛知県内で見られる淡水貝のほとんどを有していた。また魚類では、大型二枚貝に産卵する魚として有名なヤリタナゴ、タビラ、アブラボテ、イチモンジタナゴのタナゴ類にヒガイまで生息していた。

用水路が護岸工事で側壁・底ともコンクリートに代わり、細い用水路はブロックが埋め込まれて様相が一変した。護岸工事が終了して10年以上経った近頃、貝類では、ブロックの埋められたところでは継ぎ目あたりにとどまって生活している。コンクリートで完備されたところでは、土

図 1. 豊田市桝塚地区の一部



砂が10～15cmも積もり、水深はいつも30cmほどあり、流れがゆるやかなため、土手の上から見て泥底一面に点々と水管を開いている二枚貝をうかがうことができる。以前と比べ、オリエボシ、マツカサガイ、カタハガイなど、もともと僅かしか見られなかった種類の貝を確認することができなかつた。また、径4mmほどの平たい巻き貝のヒラマキモドキも見られなかつた。新しく見られるようになったのは熱帶魚や水草と一緒にいってきたサカマキガイぐらいであった。魚類では、タナゴ類に減少あるいは全く見られなくなったものが2、3種いたが代わりにタイリクバラタナゴが急激に繁殖して生育場所を広げているのは他の水の豊富な地域と同様である。

### 3. 森林公園内のある小川

中志段味から森林公園の中心部への道路に面した大池とその西側に造成された駐車場、雑木林を囲むように道が開けて南側の池へと続く、森林公園の植物園近くの地域である。池からオーバーフローした水が暗きよ溝を通ってコンクリートのますに流れ込み、そこから雑木林の間を通りぬけて落差のあるえん堤から流れおちる。小川は川幅1m、水深20cmほどで曲り角がけずられてやゝ深みを作り、深さは30cmの割になる。

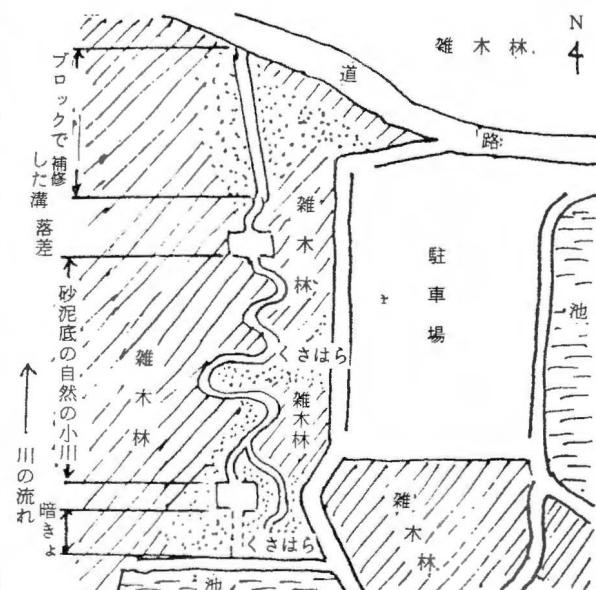
以前はここに、タガイ、イシガイ、マツカサガイ、マシジミの二枚貝と他に、マルタニシ、ヒメタニシ、カワニナ、ヒメモノアラガイがいたが、下流域がブロックで完備された近頃では、カタハガイが姿を消し代わりにサカマキガイ、コシダカヒメモノアラガイが見られるようになった。

### 4.まとめ

二つの場所で共通していることは、護岸、改修工事で一部あるいは全面にわたって手が加えられたが、貝類の生息状況は、僅少だった種類に現在見られなくなったものもあるが他の地域では稀にしか見られない種類もここでは工事前と同じ程度、中にはかえって量を増したものもあり、環境の変化が大きかった割に種類の変動が少なかった地域といえる。

淡水産の貝類の場合、大型の二枚貝のタナゴ類との共生関係、タニシ類の卵胎性（仮）モノアラガイ類のゼラチン状の卵塊など、他動物や自然の悪条件にも身を守り得る生活様式をもつものが多く、工事で一旦住み慣れた場所を失っても他の地域で生きのび、工事後以前の環境に近づいた頃もどってくると思われる。しかし、絶滅の危機に瀕しているものについては、住みついでいる環境がくずれたとき、狭い環境条件でしか生活できないため、他に定着できる条件の場所がないため、オリエボシ、カタハガイのように見られなくなっていくと考えられる。

図2. 森林公園内のある小川



## 東海市大田町にある与五八池と自然観察

東海市立船島小　相　地　　満

### 水源地としての与五八池

私が東海市の大田小学校に赴任したのは昭和50年4月である。その頃、学校の東から南にのびた木田の丘には赤く立枯れた松の木が目立った。松が皆枯れていくというのであった。赤く立ち枯れる松は松喰虫の被害ということで済まされていたのだが、松がことのほか多かったというこの丘の西側に2箇所今も松が青々と繁っている場所がある。丘の西端にあり、古くから長く絶えることなく湧き出る泉の地に建てられたという由来をもつ長源寺と丘の谷間に作られている溜池、与五八池（上池）の畔である。与五八池は上池と下池からなり、北側が田畠として開け、他を丘で囲まれている。数年前に池の周囲の雑木の伐採が行なわれるまでは、池を一周することすら容易でなく、深閑として不思議な無気味さすら感じさせる静かな池であった。「松は本来、低山や丘陵地の丘から田畠や低湿地、人里に至る接点となるようなところ、地下に清らかな水の流れているところに良く生育しているものであり、松の立枯れは松喰虫の被害だけではなく、そういう環境がなくなっているところに根本的な原因があるのです」と聞いたことがある。長源寺と与五八池に松が今も残っているのを見るにつけ、私はこの言葉をあらためて思い出す。

この地になぜ溜池が作られたのだろうか。大田町は明治になって農村であった木田村と大里村が合併して出来た。両村の中心より北側を大田川が流れ、その水利権争いは大変なものであったという。水量のそう豊富ではない大田川の水だけでは足りず、溜池を必要とした。そこで、木田の丘の地形を利用して、太光寺池、与五八池（上池、下池）が作られる。小学校2年生の社会の学習に「農家のくふう」という単元がある。春、水が動き出した頃、大田小学校のまわりの田に立って水が流れてくる方向を追っていくと、うねうねと遠まわりをしながらやがて与五八池にたどりつく。子供達は下池の一方を塞いだ大きな土手の前に立って水はここから流れてきていたのかと驚く。土手を登って見ると満々と水を湛えた池の向うに更に高く大きな上池の土手が見える。草深いその土手に立てば北側に広がる大田町を望むことが出来る。大田町の田をうるおす水はここから流れているのだということが実感としてよくわかった。更に細かい地図でよく見ると田畠が池から扇状に広がっている部分が残っていておもしろい。

かつて、この与五八池の周辺は自然な水源地として、人間や他の動物達の命を潤す聖なる場所であったかも知れない。与五八池をつつむ木田の丘には縄文前期からの人間の営みのあったことが出土する遺物によって知られている。米作りもまず、与五八池のあるあたりから始まったかも知れない。池の東側の丘からは當時、湧き水があり、湿田となっている。そういうところがまず、自然の水田となったことが充分考えられる。農事、特に水に関した年中行事や祈禱がこの池を中心として行なわれたかも知れない。丘の上にある雨尾神社や池の西側にある小さな祠、池の北側で行なわれたという正月のドンド焼などが、その名残りをとどめている。池はいつごろこのような溜池として出来たのか、それはわからない。だが、池が出来る以前からこの地が自然な水源地としてあった

ことは充分考えられるのである。

### 自然観察地としての与五八池

#### (1) 理科クラブの活動

私が与五八池の自然に興味を持ち始めたのは、顧問をしていた理科クラブの活動の中心を自然観察においていた昭和55年度からであった。それ以前の情報としては、池に水草がたくさんあるということ(50年)カワセミが来ていた(51年)。池の水を全部ぬいたところウナギ、ナマズ、コイ、モツゴ、フナなどがたくさんいた(51年)。トンボや昆虫の種類が非常に多い(52年)ということぐらいであった。理科クラブの活動を自然観察においていた理由は当時、校内に郷土資料館を作ることとなり地域の自然学習の資料を集める必要があったからである。子供達をつれてこの池に出かけた。ツリガネニンジン・ワレモコウ・アケビ・ミツバアケビ・ムラサキシミヅ・カラスウリ・ツルウメモドキ・ヤマモモ・ヒサカキ・シャシャンポ・アラカシ・タブ・カクレミノ・ヤブニッケイ・アベマキ・コナラ・クサギ・アカメガシワ・ショウブ・ヒシ・ママチャヅル・ミゾソバ・ヤブガラシ・ヤブコウジ・イヌビワ・ホソバイヌビワ・イシミカワ・サワフタギ・ガマズミ・カマツカ・イスノキ・ヤブツバキなどの植物、オオケマイマイ・マルタニシ・カラスガイ(?)・コジュケイ・キジ・カイツブリ・キジバト・セキレイなどが観察され、子供達の手で記録されていった。記録されたもの一部は「観察者」という機関紙にまとめられた。観察した結果をもとに自然観察路の設定と資料づくりをはじめていたが中途になっている。

#### (2) 親子自然観察会

親子自然観察会はもとP.T.A保健体育部秋の行事の一つとして体力測定やフォークダンスなどをしていたものを人が集まらないからという理由でなればやけっぱちになって外へ出てハイキングでもしよう。どうせ歩くなら木とか草の名前を憶えながら歩こうということになって始まったものである。それが好評を呼び、30名から60名、60名から100名と年をへるごとに多数の参加があり、58年度は150名を越える大盛況ぶりを發揮したのだった(その勢いで、P.T.Aは親子でカマボコ板をあつめ木に名札をつける活動を始め、新聞でも報道された)。例年、木田の丘を中心としたコースを選び、事前に資料を作ったり、荷ふだに植物名を書いてつるしておいたりしていたが、58年度は特に与五八池を中心にくわしく歩いた。というのも近年、この池の自然環境の悪化がはなはだしく、静岡大学の橋本先生に見ていただいた時も「あと一年二年といったところではないか」という程のものであり、その姿をしっかりと見ておいて欲しかったからである。

この池の自然環境の悪化は56年ごろから急速に進んでいる。まさに3ヶ月おきぐらいのはやさで見る度に悪くなるといって良い。原因是54年に愛知用水が使われるようになり、池の役割が少なくなったこと、56年ごろからブラックバスが繁殖をはじめ、ルアーによる釣り人が集まっていること、数年後には東西南北からのびてきている新しい道路がこの池の近くで十字に交差する計画が進められていることなどによる。かつて自然な地に池が作られたとき、それは確かに自然の破壊ではあったが、そこに棲む生物層は豊かになった。だが今日の溜池の自然の破壊は、何を、我々にもたらしてくれるだろうか。観察を続けていきたいと思う。

## 名古屋市及びその周辺の溜池の現状調査

村上哲生（市公害研）・近藤繁生（愛知医大）・浜島繁隆・鈴木達夫（市邸学園高蔵高校）  
須賀瑛文（千種中学校）

（調査目的・方法） 名古屋市東部及び、その周辺地域に位置する溜池の現状の基礎資料とする為に、該当地域の溜池、172 池について、1983年7月～8月、形態、環境、水質の調査を行った。いくつかの溜池については、過去、詳しい水質測定データがあるものの、200 以上を数えるこの地方の溜池を網羅したものはない。又、地図上に記載されている溜池であっても、土地利用状況の変化により、姿を消している例も少くない。このことから、今回、短期間に、なるべく多くの池の現状を記録するという方針で調査を企画した。調査項目は、溜池の形態（堤の種類、人工護岸の割合）、周囲の環境、水質（水色、PH、透視度、水の華の有無）、生物（周囲からの観察、聞き取り）に限定した。

（調査結果） 図1に調査した池の分布図を、表1に調査結果を示す。

1 ) 溜池の形態と周囲の環境： 溜池の形態を人手のかかった程度に応じて、A～Cの三型に分類した。A型の池が最も人工的な池であり、C型の池が自然のままの岸部が残った池である。各型の池の地域毎の分布をみてみると、守山区、尾張旭市、愛知郡の丘陵地帯では、C型の溜池の比率が高く（A、B型 36 %、C型 64 %）、名古屋市南部から、豊明市、刈谷市の低地部では、A、B型の比率が高くなっている（A、B型 71 %、C型 29 %）。C型の池は、丘陵地の谷の下部を堤で閉じた形で、平野部には存在し難く、三つの型の池の比率は、その溜池が分布する地域の地形に制約されると考えられる。溜池周囲の環境については、前述のC型溜池の比率が高い東北部丘陵地帯では、周囲のすべて、又は、一部が林である池が約8割を占るのに対し、東南部平地では、その比率は6割弱となる。2 ) 溜池の水質： 調査した水色、PH、透視度の三項目は、互いに強い関連があり、富栄養化の進行の程度に応じた値をとることが確認された（図2,3）。浮遊藻類の多い池では、一般に、水色は、緑色系統であり、透視度も低く、又、光合成による炭酸の消費の為、高いPH値をとる傾向にあった。このような富栄養化した池は、東南部の低地部に多く分布する。一方、東北部丘陵地帯には、褐色系統の水色、酸性に傾いたPHで特徴づけられた一群の池が見られる。これらの池の特性は、周囲の落葉、岸部の水草に由来する腐植質によるものであり、その作用により藻類の生産がおさえられているものと思われる。

（結論） 名古屋市及びその周辺の溜池 172 池を調査した結果、溜池の形態、周囲の環境、水質から、富栄養化した溜池と、腐植質で特徴づけられる溜池との二つに類別できることがわかった。前者は低地部に多く、後者は、丘陵部の林間に分布している。当方で、豊富な生物群集の見られる池、水の華等で不快感のない池の大部分は、腐植質で特徴づけられた池である。これらの池の腐植質は、水草、周囲の林の落葉に由来するものであり、周囲の林の伐栽、護岸工事による水草帶の絶滅でその供給は絶たれ、その池沼型は容易に富栄養型に移行し得る。現在の状況の溜池を維持するには、溜池の水質のみならず、周囲の環境も併せて保全する必要があると考えられる。

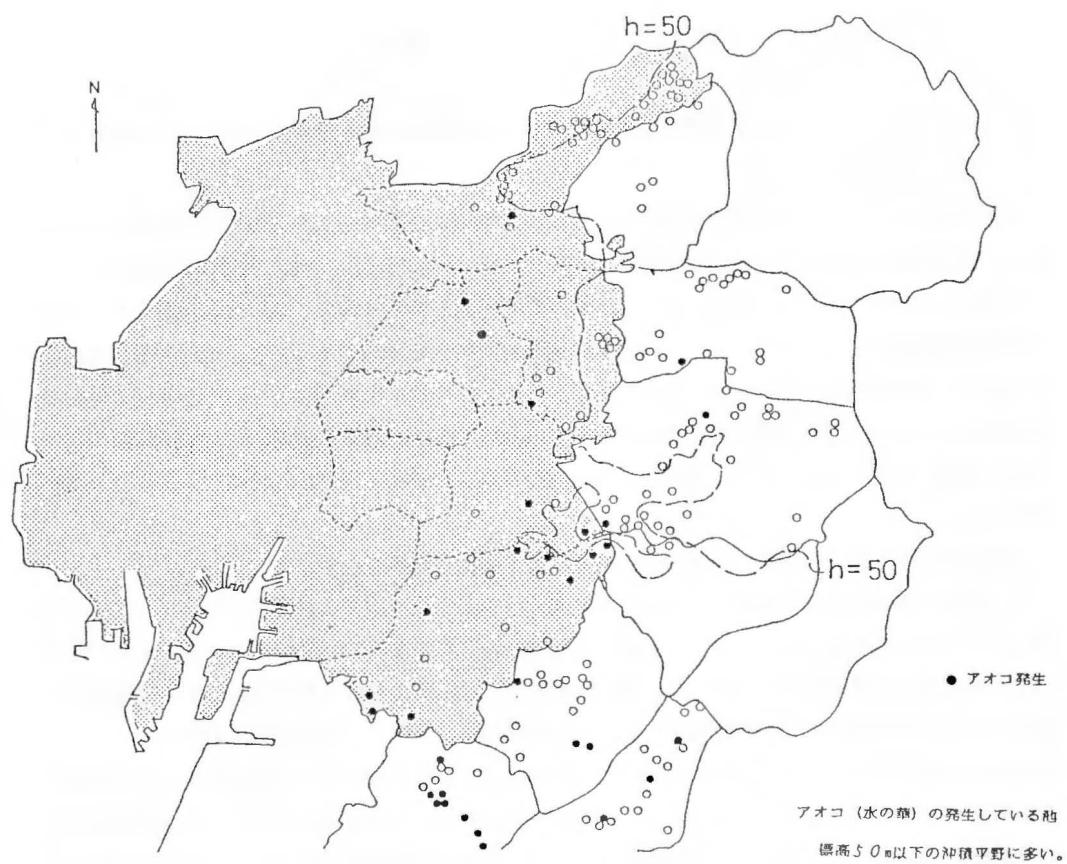


図1. 調査した池の分布図

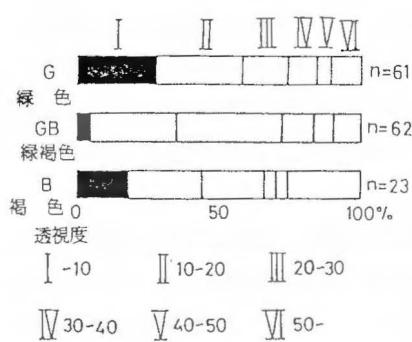


図2. 水色と透視度の関係

緑色の池は透視度の低い池の比率が高く、  
褐色の池は透視度の高い池の比率が高い。

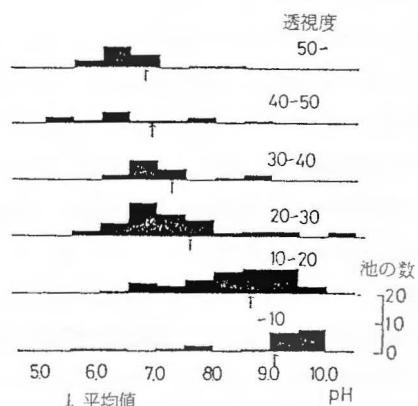


図3. 透視度と pH の関係

透視度の低い池ほど pH が高い。

表1. 調査結果

番号 1) 2)	名称	池の形 4)	環 境 5)	面 積( m <sup>2</sup> )	水 色	P H	透視度( cm )
0 0 1	雨 池	C	■	1 6 8 5 8	緑褐	7.5	1 9
0 0 2	尼 池	C	IV	2 0 3 2	"	7.5	2 1
0 0 3	石 捨 池	B	III	8 2 2 8	"	6.6	3 7
0 0 4	大 池	C	IV	4 6 2 4	緑	6.7	2 7
0 0 5	大久手池	C	III	5 2 3 7 4	"	6.6	2 7
0 0 6	大 村 池	B	IV	5 2 3 7 4	緑褐	6.7	2 6
0 0 7	カケヒ池	C	IV	5 9 5 0	"	5.4	4 2
0 0 8	風 越 池	B	IV	2 6 4 5 7	"	9.1	1 9
0 0 9	上 池	B	III	7 9 3 3	緑	7.8	1 9
0 1 0	神 池	B	III	8 8 5 6	緑褐	6.7	4 2
0 1 1	白 鳥 池	C	IV	3 4 0 4	"	6.6	1 9
0 1 2	新 池	B	III	1 6 9 0 2	緑	7.9	2 5
0 1 3	竜 卷 池	C	IV	1 4 9 7 1	褐	-	-
0 1 4	寺 池	C	IV	5 2 8 9	"	6.4	1 4
0 1 5	東禪寺上池	B	III	6 9 4 2	緑褐	8.0	1 6
0 1 6	〃 中池	B	III	3 4 7 1	褐	7.4	1 6
0 1 7	〃 下池	C	IV	9 9 2	"	7.6	1 5
0 1 8	南 原 池	消滅			野球場		
0 1 9	濁 池	消滅			産業廃棄物処理場		
0 2 0	日の後池	C	I	2 9 7 5	緑褐	7.3	2 8
0 2 1	平 池	B	III	1 6 1 1 6	"	6.7	3 3
0 2 2	大森蛭池	枯		7 4 9 0	-	-	-
0 2 3	志段味蛭池	C	IV	3 4 7 1	緑褐 <sup>(6)</sup>	6.7	> 5 0
0 2 4	二ツ池上	B	III	1 9 8 3 4	緑 <sup>(6)</sup>	9.4	1 3
0 2 5	〃 下	C	I		緑褐	8.7	1 3
0 2 6	見返池	C	IV	8 8 4 6	"	6.8	2 7
0 2 7	緑ヶ池	C	IV	2 8 6 8 3	緑	6.6	> 5 0
0 2 8	安 田 池 <sup>3)</sup>	C	IV	5 8 8 7 9	緑褐	6.2	5 0
0 2 9	※小幡綠池	枯渴					
0 3 0	※ 〃	C	IV	-	褐	6.0	3 2
0 3 1	※下志段味	A	I	-	-	-	-
0 3 2	※ 〃	C	IV	-	-	-	-
0 3 3	※ 〃	C	IV	-	褐	6.8	1 9
0 3 4	※中志段味	C	IV	-	"	6.1	> 5 0
0 3 5	※上志段味	C	IV	-	緑	6.7	2 9
1 0 1	茶屋ヶ坂池	B	III	6 2 5 5	褐 <sup>6)</sup>	8.8	1 5
1 0 2	猫ヶ洞池	C	III	6 5 8 0 9	褐 <sup>6)</sup>	6.6	1 2
2 0 1	荒 池	B	III	1 0 3 4 9	緑 <sup>6)</sup>	9.1	1 6
2 0 2	井堀上池	C	IV	5 1 5 7	緑褐	6.0	2 4
2 0 3	〃 下池	C	IV	6 8 8 6	"	5.6	1 3
2 0 4	ぐみ池	A	I	-	褐	6.7	2 0
2 0 5	五合下池	A	II	1 8 5 0 0	"	8.8	6
2 0 6	新 池	C	IV	1 1 9 1 8	緑	9.0	3 8
2 0 7	塚ノ松池	C	IV	3 2 1 1 3	褐	6.1	4 7
2 0 8	デッショ池	A	I	1 7 9 5 0	緑褐	8.9	1 7
2 0 9	西 烟 池	C	IV	9 6 1 3	"	4.9	1 1
2 1 0	牧 野 池	C	IV	2 2 9 1 6 6	"	1 0.5	2 1
2 1 1	廻 彦 池	C	IV	7 2 7	褐	5.7	2 0
2 1 2	明 徳 池	B	III	1 6 3 7 7	緑	6.1	1 6

番号	名称	池の形	環境	面積(m <sup>2</sup> )	水色	P H	透視度(cm)
3 0 1	荒 池	C	■	9 1 2 3 9	緑褐°	8.8	1 7
3 0 2	大 根 池	B	IV	2 1 5 8 4	緑褐	8.4	1 6
3 0 3	新 池	B	I	1 9 8 3 5	緑°	9.2	9
3 0 4	双 子 池	A	■	6 4 4 6	褐	7.6	2 3
4 0 1	赤 松 大 池	B	■	1 4 4 5 9	緑°	9.6	8
4 0 2	水 主 ケ 池	C	■	7 6 3 5 7	緑°	9.9	1 3
4 0 3	要 池	A	I	2 9 1 2 6	緑褐	8.6	1 6
4 0 4	神 沢 池	B	I	1 4 8 7 6	緑褐°	7.3	3 3
4 0 5	蛇 池	C	■	-	緑°	9.5	2 3
4 0 6	四 郎 鮎 池	A	I	-	緑褐	9.2	1 7
4 0 7	砂 走 池	B	■	1 2 4 7 6	緑褐°	9.4	1 5
4 0 8	戸 笠 池	B	■	3 0 7 4 3	緑°	9.0	1 8
4 0 9	鳴 子 池	A	I	1 8 0 3 6	緑褐	7.9	2 1
4 1 0	新 海 池	C	■	1 0 2 8 2 4	緑°	8.8	1 8
4 1 1	鶴 池	C	IV	-	褐	8.0	> 5 0
4 1 2	平 野 池	B	■	1 9 8 4 5	緑褐	8.9	4 0
4 1 3	琵 琶 ケ 池	C	■	6 2 3 9 1	緑	7.9	2 0
4 1 4	二 ツ 池	B	■	8 3 6 6	緑°	9.5	7
4 1 5	螺 貝 池	A	I	2 0 4 7 3	緑褐	9.1	2 8
4 1 6	松 池	B	I	6 6 4 4	褐	7.7	4 4
4 1 7	蝮 池	C	■	3 8 9 8 8	褐	8.2	3 3
4 1 8	※ 徳 重	B	■	-	緑°	9.9	9
4 1 9	※ //	A	I	-	褐	8.1	1 9
5 0 1	維 摩 池	C	IV	1 2 6 9 5 4	緑褐	7.0	2 9
5 0 2	岩 本 池	C	IV	5 5 8 0 0	-	-	-
5 0 3	大 広 見 池	C	■	4 4 0 0 0	緑	-	-
5 0 4	大 道 平 池	C	IV	4 6 6 0 0	緑	7.2	2 6
5 0 5	竜 ノ 水 池	C	IV	4 5 0 0 0	緑	6.8	> 5 0
5 0 6	濁 池	C	IV	1 4 4 9 7 0	-	6.9	1 1
5 0 7	平 池	B	■	5 0 2 1 4	緑褐	6.9	2 4
5 0 8	※ 旭ヶ丘町	消滅					
6 0 1	井 堀 池	C	IV	7 3 0 0	緑褐	6.7	2 5
6 0 2	岩廻間上池	C	IV	4 4 0 0	褐	6.5	8
6 0 3	// 下池	C	■	1 2 0 0	//	5.8	6
6 0 4	払 ケ 池	C	■	5 9 0 0 0	//	6.8	4
6 0 5	卯 塚 池	B	■	2 5 0 0	//	6.2	2 5
6 0 6	オ ヨ ナ ガ 池	A	I	-	緑褐°	-	-
6 0 7	カキツバタ池	B	■	-	褐	6.1	> 5 0
6 0 8	北 浦 池	C	IV	1 8 0 0	緑褐	6.3	2 8
6 0 9	清 水 池	C	IV	3 8 0 0	緑	6.1	3 7
6 1 0	立 石 池	B	I	4 5 8 0 0	緑褐	8.5	> 5 0
6 1 1	出 田 池	A	■	1 6 0 0	褐	7.6	1 8
6 1 2	中 根 中 池	C	IV	5 3 0 0	緑	5.5	1 2
6 1 3	長 鶴 池	C	IV	2 0 6 0 0	//	7.5	2 2
6 1 4	ヒ 口 池	C	IV	3 7 0 0	//	6.2	1 4
6 1 5	溝 入 池	A	I	3 4 0 0	緑褐	7.4	2 5
6 1 6	上 池	C	IV	2 5 0 0	褐	7.2	1 0
6 1 7	宮 ケ 洞 池	B	■	7 6 0 0	緑	7.0	> 5 0
6 1 8	葦 池	C	I	5 4 0 0	緑褐	6.6	3 0

番号	名称	池の形	環境	面積(㎡)	水色	pH	透視度(cm)
701	愛知池	C	III	-	緑褐	7.1	21
702	新池	A	I	23000	"	8.6	22
703	阿良池	C	IV	10900	"	6.8	15
704	新ラ田池	B	III	8100	"	8.1	10
705	岩藤新池上池	C	IV	10900	"	6.6	30
706	"下池	B	III	30000	緑	6.4	44
707	海老池	B	II	53400	"	6.8	38
708	鶴恩慕池上池	C	IV	-	"	5.1	40
709	笠寺池	C	II	8000	"	9.5	8
710	芋地池	A	I	5300	緑褐	8.5	18
711	驚池	A	I	11300	緑	7.4	20
712	高松池	C	IV	6500	"	6.5	20
713	寺脇池	A	I	1000	"	6.7	>50
714	生出し池	B	III	16900	緑褐°	9.3	16
715	機織池	C	IV	77300	"	6.4	21
716	林池	B	III	17400	緑	6.7	36
717	東池	A	II	4700	褐	6.8	>50
718	藤塚池	C	II	2900	緑褐	7.5	17
719	二ツ池上池	B	II	3700	緑°	8.0	9
720	弁天池	C	IV	31600	"	7.9	48
721	堀割池	C	III	5600	緑褐	6.4	23
722	三ツ池上池	C	IV	2400	褐	5.7	>50
723	"中池	C	II	3100	緑褐	6.0	>50
724	"下池	C	II	2700	"	6.3	36
725	五色園三ツ池中	B	III	6800	緑	6.3	30
726	"下	B	II	4300	"	6.3	>50
727	蟹甲三ツ池下	A	III	8200	褐	6.7	>50
728	三ツ峰上池	A	I	13000	緑	7.1	32
729	"下池	C	IV	19900	"	6.3	>50
730	美濃輪池	A	I	35000	緑褐	7.7	8
731	※岩藤新池北	C	IV	-	"	5.9	>50
801	牛廻間池	A	I	3930	"	7.8	24
802	濁池	B	III	28647	緑	7.1	9
901	荒巻上池	B	III	7000	"	8.4	11
902	"下池	A	III	19000	"	8.4	13
903	大蔵池	A	I	37000	"	9.7	18
904	大狭間上池	B	III	13000	緑褐	8.6	33
905	"下池	B	I	13000	"	8.4	18
906	大原池	B	I	26000	"	9.5	11
907	唐竹池	A	I	1600	-	7.0	25
908	皿池	B	III	18000	緑褐	8.4	11
909	善波池	A	-	14000	枯褐		
910	稚池	B	I	16000	緑°	10.4	11
911	鶴根池	B	III	2000	褐	6.8	22
912	長池	B	II	3000	緑	9.8	42
913	西池	C	III	13000	緑°	9.7	32
914	琵琶池	A	II	16000	緑°	10.1	28
915	三崎池	B	III	20000	緑	6.9	>50
916	三ツ池	B	III	12000	緑褐	7.2	33

番号	名称	池の形	環境	面積(m <sup>2</sup> )	水色	pH	透視度(cm)
1001	岩ヶ池	B	IV	110951	緑°	7.2	35
1002	牛池	C	IV	17654	緑褐	7.4	21
1003	大池	B	III	3068	"	6.3	>50
1004	上すり池	B	II	9141	緑	9.5	11
1005	唐池	B	II	9972	褐	6.7	26
1006	草野池	B	II	80828	緑褐	6.4	42
1007	小堤西池	C	III	33159	枯褐		
1008	新池	B	II	16997	緑褐	7.2	21
1009	洲原池	C	III	179627	緑°	9.6	9
1010	竜ヶ根池	B	II	29563	緑	9.7	9
1011	沼田池	C	IV	8833	褐	8.0	21
1012	花池	A	I	15131	-	6.8	35
1013	広沢池	C	IV	20413	緑褐	6.0	48
1014	間野四郎池	B	II	12411	"	7.0	17
1015	南池	B	II	42964	緑°	8.6	24
1016	山根池	A	I	3358	緑	7.3	46
1101	金池上池	A	I	11445	緑褐°	9.3	8
1102	"下池	A	I	6578	緑	9.0	17
1103	鴨池上池	B	III	9371	緑°	9.0	17
1104	"下池	B	III	14082	"	9.1	9
1105	川池	A	I	18269	"	9.7	8
1106	新池	A	I	-	"	6.8	21
1107	澄池	A	III	6968	"	9.2	5
1108	立会池	A	I	4287	"	9.9	9
1109	立合池	C	IV	18670	緑	9.2	10
1110	トチネ池	B	III	1487	緑°	9.5	9
1111	二ツ池	C	IV	58591	緑褐	8.5	23
1112	マス池	A	I	5000	"	8.0	18
1113	藪池	C	IV	5609	緑	9.1	6

表-1 の説明

- 1 ) 該当する池の所属する行政区を示す。( 0 : 守山区、1 : 千種区、2 : 名東区、3 : 天白区、4 : 緑区  
5 : 尾張旭市、6 : 長久手町、7 : 日進町、8 : 東郷町、9 : 豊明市、10 : 刈谷市、11 : 大府市 )
- 2 ) 各行政区の内通し番号、50音順。
- 3 ) ※は、無名のため所在地を示す。
- 4 ) 池の形を示す。( A : コンクリート、石垣による護岸率が 80 % 以上で形は方形で直線部分が多い。  
B : 同護岸率が 50 % 以上で形は半円形または台形で直線部分が比較的多い。C : 同護岸率が極めて低く形は円形またはアーバ状で直線部分は少い。)
- 5 ) 池周囲の環境を示す。( I : 緑地はほとんどなく大部分が人家や道路に囲まれる。II : 一部に草地または畑地がみられる。III : 部分的に林や草地で囲まれる。IV : 大部分林で囲まれる。)
- 6 ) 水色の右肩の丸印は、水の華の発生を示す。

## 活動の記録

- S 58. 7. 30 名古屋市及びその周辺の溜池の現状調査について第1回打ち合せ。
8. 27 名古屋市及びその周辺の溜池の現状調査について第2回打ち合せ。
9. 24 名古屋市守山区森林公園の植生観察会（飯尾俊介担当）。
10. 29 名古屋市及びその周辺の溜池の現状調査まとめ  
「第2回ため池の自然を考える会」開催についての打ち合せ。
11. 26 「第2回ため池の自然を考える会」実施要項、資料の作成と打ち合せ。
12. 25 「第2回ため池の自然を考える会」於名古屋市名東区社教センター。参加者22名。  
「塚ノ林池（名東区）の保存と活用にしての要望書（案）について」浜島繁隆。  
「名古屋市とその周辺の溜池の現状調査報告 一池の水質、形態と周囲の環境 一」  
村上哲生、近藤繁生。「名古屋市東部地域の自然を都市環境に生かす方策」鈴木達夫。  
「昔のため池の姿 — 森林公園付近の水生植物採集案内 —」飯尾俊介。
- S 59. 1. 7 名古屋市役所に「塚ノ林池（名東区）の保存と活用についての要望」を提出。内容は、次頁参照。
1. 21 例会の予定打ち合せ。
2. 25 第12回研究会「都市環境における水生昆虫」近藤繁生。
3. 10 与五八池観察会（相地 満担当）。
3. 31 第13回研究会「水界における水草の役割」浜島繁隆。
4. 28 第14回研究会「水の華について」村上哲生。
5. 26 与五八池ほか東海市市内の溜池の観察会（相地 満担当）。
6. 30 第15回研究会「水草の実験と観察、ユスリカ幼虫の実験と観察」鈴木達夫。
7. 7 夏期合同調査打ち合せ。
8. 18 会報の内容について打ち合せ。
9. 29 第16回研究会「ため池の意識調査」鈴木達夫。  
(注) 研究会および会合は、市郷学園高蔵高校にて実施。

### 第3回『ため池の自然を考える会』開催についてのお知らせ

日 時： 12月23日(日) 午前9時30分～  
場 所： 名古屋市名東区社教センター  
視聴覚室

昭和59年1月7日

名古屋市長 本山政雄 殿

名古屋ため池の自然研究会

第二回ため池の自然を考える会

代表 浜島繁隆

### 塚・林池(名東区)の保存と活用についての要望

名古屋市内には、かつて多くのため池が散在し、池とやまととりまく自然は、この地域を特色づける景観となっていました。しかし、近年の宅地開発や川の浚渫とともに失い、画一化した都市化が進んでいます。

現在の都市環境で最も欠けた要素は身近に自然とふれあう場がないことではないかと考えます。やがて本地域の特性を生かした自然とのふれあいの場として、ため池とそれと一緒に自然環境を保存すべきであると考えます。またため池は洪水調節の面で重要な役割を果しています。昨年(昭和58年)、私達の研究会で市内70個のため池の現状調査をして塚・林池と共に周辺の林は、市内で最も自然の姿をよくとどめていることを知りました。いずれ、塚・林池を中心とした高麗地の整備事業が実施されることと思いますが、その際、つぎの点にご留意、下さるよう希望します。

1. 塚・林池は1つの生態系として安定した状態を維持しているので、池と共に集水域の自然を破壊しないこと。

2. 自然観察や自然に親しむ場として、釣堀風など釣マニアだけの場としないこと。

3. 池(堤)の補強工事などの際、池の植物、動物を保護するため放水し池底を干上がらせないこと。

4. 帯地をコンクリートにしないこと

5. 事前に地域住民や各種の研究グループの意見を聞き、並んで十分尊重すること

以上

ため池の自然 No.2 (1984年9月)

発行 名古屋ため池の自然研究会

浜島繁隆